

文 献 紹 介

千葉とくじ著『地理と民俗への道

—自学のすすめ—

大明堂 1999年2月

B6判 153ページ 本体2,800円

本書は、日本地理学会の名誉会員であり、日本民俗学会の代表理事（会長に相当）を務められた著者の千葉徳爾先生が、後進に向けて自らの学問形成の歩みを平易な語り口で述べられたものである。

まず、本書の構成と内容の概略を紹介しよう。

第一章「自学のはじめに」では、著者の自学の体験が軍隊経験などを通して述べられている。軍隊生活において、気象観測を中心とした定点観測を任務とする観測班に採用され、戦争末期には兵要地誌調査隊長として大興安嶺一帯を調査に歩いたという。著者は、この経験を「軍事費で自学の勉強をしたことになる」と述べるが、自学の成果を生むには「多大な体験と知識の蓄積に加えて、強い関心の閃きとそれを執拗に追求する努力とが必要である」とも述べるように、戦後の強制労働収容所生活を含めて、そこで得られた体験と閃きの追求が、その後の研究成果に結実したのであった。

また、著者が自学を身につけたのは、主に地理学の分野であって、日本民俗学は柳田國男の書齋に出入りする中で訓練されたものだと言っているのは興味深い。それが著者の地理学の独自性と結び付いているのであろう。

第二章「私の研究法への批判と反論」では、小泉武栄氏の著者への批判に対する反論が展開される。題材としては九州山地における起伏量と野生大型生物の分布が取り上げられており、多くの野獣は急峻な山地に生息することで、人間と棲み分けをしているが、イノシシのみが人間と同じ地表空間を共有することから、農作物への被害が顕著であることを指摘するが、個々の調査研究は長期的な研究課題の一部となるものという著者の姿勢は示唆に富む。その蓄積が、まさに『狩猟伝承研究』の大部のシリーズとして結実したのである。

後半では、理学博士論文となった、はげ山の研究が集大成される過程が述べられるが、大興安嶺一帯の周水河地形研究から瀬戸内の人為的荒廃林地研究へ至る道程はめざましいものがある。著者

は三カ月で書いた速成品と謙そんするが、もう少し詳しく裏話を聞かせていただきたかった。

第三章「自学をすすめるために」では、まず博物館での自学の方法が語られる。著者は大英博物館における観察から、中東における象牙彫刻の地域的差異を原材料産地からの輸送距離と地域性をもとに論じる。考古学・芸術的分野にも地理的方法が応用可能という実践例となっている。

次に、ロシアの作家アルセーニエフの『デルスウ・ウザーラ』を題材として、主人公の老猟師の観察眼の鋭さが紹介されるが、この一文に注目できるのも、狩猟伝承を永年にわたって探求してきた著者ゆえであろう。

章末で、古代中国で通貨として流通した寶貝の供給源をめぐって、師の柳田國男が提唱した沖繩説を、著者は雲南省昆明博物館の展示観察から補強している。自学の進歩は、同じ書物を再び読んだ際に新発見があるかどうかでわかるとする著者の指摘はもつともで、上述の寶貝の例は師の『海上の道』を何度も暖め直した成果なのであろう。

第四章「民俗学と地理学」では、これまでの章で、主として地理学的な自学の方法が論じられてきたのに対して、民俗学における自学の方法が述べられる。ここでは、著者が、まず一群の図書の読書から始めて、個別の著書、さらに個別論文もしくは個々の研究者との接触へと至った、師の柳田國男から受けた指導方法が回顧されている。

さらに、師から勧められて、遠野と椎葉の二つの山村に調査に赴いたが、その段階では何の成果も得られなかったとの反省がある。しかし、それらの調査行が『狩猟伝承研究』の集大成に結び付いたことは疑いない。数度目の椎葉歴訪で山鳥の尾羽の靈力に気が付いたエピソードは、その一端であろう。

また、著者の大学就職が決まった際の師の柳田國男からの「郷土研究者とは論争しないこと」、「大学では同じ講義を二度するな」という助言は、評者も肝に銘じておきたい。

章末の「自学の人」としての心がまえで、傲慢に過ぎても謙虚に過ぎてもいけないとの指摘は重要である。常に学会での発表を欠かさず、他人の発表にも必ず鋭い質問を行う著者の姿勢は、我々後進にとって模範となってきたが、若い研究者に

とつても、この指摘は有益であろう。

第五章「海の旅と自学」・第六章「陸の旅と自学」・第七章「新しい問題」は、それぞれ師の柳田國男の著書『海南小記』・『後狩詞記』・『遠野物語』を題材としている。

ここでは、柳田自身が旅で得た閃きを「自学」として、どのように柳田民俗学の形成に生かしたかを著者の解釈から述べている。『海南小記』からは、常民への視線と周囲論という民俗学的法則の提示を読み取り、『後狩詞記』からは、山間部に残された伝統文化の共通性を指摘するが、同時に柳田自身が自立を目指した『海南小記』以降の旅の記録と、それ以前の作品とでは「覚悟のちがい」が存在しており、自学の目的を明確にして、それに邁進することの必要性が強調されている。

一方、『遠野物語』からは、幻覚と残像の解釈についての新見解が述べられる。まず、幻覚と残像の差異として、幻覚は目を閉じれば見えなくなるものであるが、残像は目を閉じて、なお見えるという感じがあると区別する。そして、『遠野物語』に出てくる「まぼろし」を見るという現象は、栄養不足から来る急性血糖値低下症候群であろうと結論づけている。

この症状は紀和の茶粥常食地域や九州島原半島にも顕在化するといい、このような調査研究には医学・精神科学などの協力も不可欠とされるが、この解釈は著者自身の入院体験に由来するとはいえ、著者の関心領域の広大さを物語るものであろう。

第八章「車窓の観察と自学」では、南イタリアの土壤侵蝕の観察が述べられる。この問題は、理学博士論文となった「はげ山の研究」の延長上に位置づけられるものであるが、まさしく個々の調査研究は長期的な研究課題の一部となるものという著者の姿勢の顕現といえよう。

そして、地中海型土壤侵蝕の背景には、地域特有の歴史と現状が存在するという解釈もまた、「はげ山の研究」と共通点を有しているが、ここに提示された地理学的調査研究は、観察中に閃いたテーマをその後長い時間と労力を重ねて研究してゆくやり方であり、それは主として柳田國男から指導されたものであるという。これは、単発的な調査研究が散在する地理学の現状への警鐘ともいえよう。

本書の巻末には、「ギリシア人の考え方について」が付されている。この付章は著者の大英博物

館における一週間もの観察から得られた成果であり、十年余り以前の観察とはいえ、著者の行動力と集中力には改めて感嘆させられた。この付章は博物館の展示物を、それほど重要視しない地理学者への問題提起でもあろう。

以上、いささか冗長な紹介に過ぎたが、本書は著者の自伝的側面も有しており、「自学」を目指す人々のみならず、後進の地理学者と民俗学者にとつても、方法論的に大いに刺激となる書物である。

とりわけ、近年はかつてのような地理学と民俗学の連携が薄らぎつつあると評者には感じられるため、両者の学際的協力にとつても有益な出版であることは疑いない。

最後に、評者自身も、千葉先生の数多くの著作を味読する中で、地理学のみならず民俗学への関心を開かれた一人であり、本書の紹介の機会を与えていただいたことに感謝しつつ稿を終えたい。

(岩鼻通明)

梶川勇作著：『近世尾張の歴史地理』

企画集団 NAF 1997年11月

A5版 212ページ 1905円(本体)

著者はかつてニュー・ジオグラフィーに大きな影響を与えたペーター・ハゲットの著作を翻訳して我が国に紹介するなど、新しい地理学の普及にも貢献をしたことで知られている。本書を構成する諸論の多くは1980年以降執筆されたものであるが、基本的には著者の名古屋在住時にあためられたであろう近世尾張に関する歴史地理学的業績である。出版以来2年余の月日が経過し周知の書となっているが、あらためてその内容を紹介することとする。その構成は以下の通りとなっている。

序章 近世の尾張

第1章 尾張地方の近世の新田村

第2章 近世の東海道佐屋路と佐屋宿

第3章 近世の知多郡における給知と地頭

第4章 丹羽郡の近世村の土地条件

第5章 尾張西南部の近世村の土地条件

第6章 近世後期の名古屋近郊の土地条件

章立てから察せられるように、本書は近世尾張の村に焦点を当てた地誌的研究書であるといえよう。以下簡単に各章の内容を紹介していく。

まず序章において尾張藩成立の経緯を紹介した後、本書の中心的資料となっている尾張藩の地誌である『寛文村々覚書』と『尾張徇行記』につい